

未開社會の平等性

村 川 澄

はしがき

一、女性の社会的地位

二、年齢階層

三、文化的所産としての階級

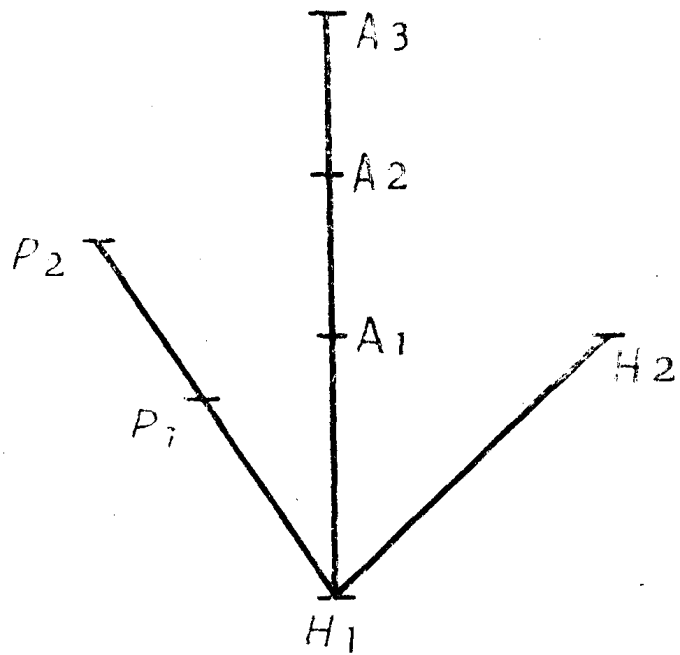
はしがき

未開人は Rousseau の言うように、純真無垢の自然人であつて完全な個人の自由を享受し得たものでもなければ、又、一般に考えられているように、劣悪残忍であつて無秩序な社会生活を営んでいるものでもない。実際に未開人の生活の中に入り、その生活状態を具体的に調査研究した者は誰しも、彼等の社会が假令「政治的に組織された社会」ではないにしても、法、道徳、礼儀等が未分化のまま、呪術・宗教（呪術と宗教とは概念的には區別することが出来る。然し未開社会に於ては、実際に於て両者は混融していて判別することを得ない。呪術と宗教とはかく峻別し得ないがために、普通呪術・宗教なる語が用いられる）と密接に絡み合つて統一ある一体をなし、それによつて彼等の社会の秩序と平和とが維持せられていることを知り、又、各民族の中に於て夫々程度の差こそあれ、何等かの形態に於て成層を有する社会体を構成しており、成員が眞に

平等な非成層を成すものではないということを理解するのである。即ち *Ubi societas ibi ius* の法諺の眞理と、完全な意味での *anarchy* という語を用い得るような未開民族は今日何処にも現存しないということを体認するのである。然しそこに多少の例外はあるにしても、未開社会に於ては、我々の文明社会に比し、いわば相対的意味に於て、平等性が強いということは卒直に之を認めなければならぬ。Vierkandt が、文明社会を支配的社会形態とするに對し、未開社会を協同的社会形態となし、未開社会に於ては、社会的勢力が社会の全成員に均等であり、従つて個人並びに集團の社会地位に大きな差異は認められない、と言つたことはこの意味に於て肯けるのである。然し同じく未開民族の社会形態といつても、そこには風土的、経済的條件の異なるに從い、又、各民族の有つ特異性や歴史的變遷に基き、多種多様の社会形態を示すのであり、それ等に関する普遍的な原理を求めるとは、現在に於ては不可能に近いであらう。だが未開社会に於ても、経済生活が文化の基盤の一つとして最も主要な役割を演じていることは勿論、物質文化の一定段階にある未開民族の間には、全般的に言つて類似の社会形態を有することは之を否定することを得ないのである。かかる意味に於て私はダイヤ族の社会組織に関する調査の一端を誌すことにより、少くとも之と同一経済發展段階にある未開民族に共通する特性を示し得る資料を提供したいと思う。

私は本論に入るに先立ち、政治、法律と経済及び物質文化形態との緊密な相関関係を明にした Diamond の経済發展段階の図式を示しておく必要がある。Diamond は彼の著書 *Primitive Law 1935* に於て、總ての経済形態の出発点となる始源的なものは、低級採集・狩猟生活団体 H_1 であつて。之より上図の如く三つの方向に分化發達したという。

第一の方向は、低級採集・狩猟生活 H_1 より高級狩猟生活 H_2 へ、第二の方向は、低級農耕段階 A_1 、中級農耕段階 A_2 及び高級農耕段階 A_3 へ、第三の方向は、低級採集・狩猟生活 H_1 に牧畜が加わり、低級牧畜段階 P_1 へ、高級牧畜段階 P_2 へと發展する。 H_1 は野生動物の狩猟よりもむしろ植物の採集を中心として生活を維持する最も未開な段階であり、その代表的なもの



としてオーストラリアの原住民をあげている。H₂は野生物によつて生活するものではあるが、植物の採集よりも狩猟・漁撈が中心となつて来る。北米インディアンをその例にあげている。A₁の段階に入ると、既に粗笨的な農耕技術を知つて来るが、主食物の獲得方法は未だH₁の域を脱していない。その代表的な民族としてアジアの未開民族及び北米インディアンの一部があげられている。A₂の段階に至ると、主食物を農耕によつて獲得する。オセアニア及びアフリカの原住民はその代表的なものとして例示せられる。A₃の段階に達すると、犁耕が行われはじめる。アジア及びアフリカの原住民の一部が例示せられる。P₁段階は耕作を交えぬもの、P₂段階に進んで耕作を交えて来る。両者の例は共にアジア及びアフリカの原住民があげられる。

次にまた記述の必要上、一応未開人と文明人の類別について一言触れておこう。未開人と文明人の類別は、周知の如く Ratzel, Vierkandt, Levy-Bruhl, Danzel 等によつて示されているのであるが、何れも両者の概念的区劃の明確を缺く憾があり、社会科学にとつて最初の必要事といわれる概念の明確という点から見れば、人類の文化発展の普遍史を構想した Morgan の區別に従うべきであらう。普く知られる通り Morgan は、人類の文化発展段階を野蠻、未開、文明の三段階に分ち、未開と文明との段階的相違を文字の有無に見出し、文字の發明を以て文明の開始と看做している。この説はその後 Tyler や Hobhouse 等によつて支持せられ、近くはアメリカの Faris は、未開人を、pre-literate people の語を以て表現し、それは学界の通用語とならうと言われている。

私が一年四月に亘り、実地調査の対象とした民族は、西ボルネオの叢林中に住むダイヤ族であるが、彼等は未だ文字というものを知らず、概ね Diamond の示した経済発展段階に於ける A₂ 即ち中級農耕段階の範疇に属する未開民族である。ただ西ボルネオのダイヤ族といつても数十の部族（ここに言う部族は、一定の地域に居住し、慣習や宗教等を略々同じくし、同一方言を語る集団であるが、社会生活、経済生活の単位としては甚だルーズな集団である）に分れ、文化の発展段階から言つても、プナン・バトー族の如く未だ低級採集、狩猟生活団体の域を脱していない部族から、ヒンズー、支那、イスラムの中古文化、その他欧米の文化の影響を受けて相当高度の文化を有する部族をも包含しているので、それ等の諸部族に共通する根本的特性を示すことを得ない。ここではたゞ多くの危険を伴わずして調査が出来而も外来文化に接触する機会が比較的少く、従つて彼等の固有の文化を有し各々その特性を保持しつつ生活している上カプアス地方即ち西ボルネオを貫流してジャワ海に注ぐカプアス河を溯ること約七百軒の地域に連るリヤン山脈及びピピラン山脈地帯に居住するデサ・レバン、デマン、スカパ、モアラン、スバル、スブルアン、シラツの七部族に共通する社会階層の特質について記述することにした。従つてこの小稿に於てダイヤ族と称するのは、主として中級農耕段階にある前記七部族を言うのである。

二、女性の社会的地位

一般的に言つて、男性の地位は、女性のそれより優位に置かれていることは、未開社会の間に見られる普遍的な現象である。然し食物の獲得に対する両性の夫々の重要性の差が、彼等の社会的地位の高下に影響を及ぼしている事実がある。私はそれを経済発展の各段階に亘つて概説してみよう。

低級採集・狩猟生活の段階に於ては、両性の経済的地位の重要性が略々同一であり、従つて男女の社会的地位が比較的平等であることは、ウイーン学派の強調するところであり、それが高級狩猟段階に入つても社会形態に根本的変化の見ら

れないことは Grosse の主張する通りである。従つてこの段階に於ても男女の社会的地位の懸隔は見られないものと解してよい。牧畜民の間では、女性の社会的地位の低いことはアフリカやアジアの牧畜民の間に多く見られるところである。低級農耕—耨耕—が女性の手で、採集段階から直接発展した事実は、経済地理学者 Hahn の指摘したところであるが、この段階に於ては、女性の耕作によつて生活を維持している所では女性の地位が高いことを実証する資料は多い。中級農耕段階に於ける男女の社会的地位については、私のダイヤ族の実地調査の資料に基いて簡単に説明する。ダイヤ族間に於ては、いわゆる焼畑耕作の方法が行われている。彼等は施肥ということを知らないので、一度耕作した土地を翌年続けて耕作することはなく、五年乃至七年間はその土地を休閑地として放置することによつて地力の恢復を待つ。そのクムダハ（崑跡）は熱帯特有の光熱と多温のため、数年にして倭林となる。その倭林又はレンバ（未だ開墾されたことのない原始林）を開墾するには、最初竹草や灌木を芟除するのであるが、それは男女の協同による。次いで取残された巨木伐りに移るが、この作業は、親族の男子壯年者の互酬的協力によつて行われる。かくして伐り倒された丘陵の本草は、それが乾燥した後、四方より火を放つて焼き、その木灰で覆われた地面に男はトガール（掘り棒）で穴を穿ち、それに続いて女はその穴の中に四・五粒の粃と時には野菜の種も交えて落とし込むのである。收穫期までに行う普通二回の除草も、收穫期に於ける摘穂も男女の協働により、大体に於ては男女共に各自の経済活動の同量の持分を勤勉に分担している。他の生産活動について言えば、副食物を獲得するための狩猟や漁撈は主として男性の手によつて行われ、植物性食物の採集は殆んど女性の専業となつている。家畜としては一戸夫々二・三頭の豚と十数羽の鶏を飼育しているが、それは何れも女性の専業である。彼等は家畜を常食とすることはなく、時には贈答用の物資となることもあるが、殆んど公共的または私的祭儀に於ける犠牲として供せられるのである。未だ鋤、鍬を知らず犁耕の段階に達していない彼等の間に牛、馬、水牛等の役畜を飼育していないことは勿論である。ダイヤ族は、アメリカの原住民やポリネシヤと共に、Adam Smith によつて

系統立てられ主張された經濟發展の三段階——狩獵、牧畜、農業——の牧畜段階を通過せず農耕段階に入つた民族であることは注目に値しよう。中級農耕段階に於ては、男女の社会的地位は、その經濟的地位の差によつて高下の差異を示さないものであり、それは高級農耕——犁耕——段階に入つても異なることはないと思われる。

以上は食物の獲得に対する両性の經濟的地位の重要性が、社会的地位の高下を決定する点についての略説である。

一般について言うならば、男女両性の不平等が明白に現れるのは、政治的、宗教的及び財産的領域の三つの分野に於てである。現在知られる限りでは、完全な意味の女人政治が行われている未開民族はなく、政治的權力を握る者は例外なく男性であり、ダイヤ族に於てもこれが例外をなすものではない。宗教的分野に於ては、不淨と見做され易い女性は男性に比して一般に社会的地位は低い。民族によつては女性の Shaman も見られるが、全般的に見て宗教的勢力は男性によつて行使せられ、ダイヤ族に於ても祭司は男性であり、女性は聖なる場所に近づくことさえマリー（禁忌）とせられてゐる。財産の点についても、母系的相続の場合に於てさえ、女性が財産を相続することは稀であり、ダイヤ族に於ても財産は男性が相続する。かくの如く未開社会の女性は、政治、宗教及び相続という三点に於ては、男性よりも劣位にある。

三、年 齡 階 層

年齢の自然的差異による社会的地位については、私がダイヤ族を調査した資料に基いてその大略を説明する。ダイヤ族に於ても、他の未開民族に於けるが如く、大体次の五つに類別せられる。第一は幼児である。幼児については生後五日目又は七日目に命名式が行われ、その日はじめて高床長家（ダイヤ族に於ては、幅約二十米、長さ約十米乃至五十米もある長家に、數家族乃至數十家族が共住する）の共同広間に出て部落民と対面し、それが終つて水浴場に於て水浴の祭儀が行われる。この命名式及び水浴式によつて、幼児は家族及び氏族の（正確に言えば、氏族では成員の系図が男系又は女系の何れか一方の共通

の祖先に繋つており、又、常に族外婚であつて、同一集團の者との結婚は嚴重に禁止される。ダイヤク族では集團構成員の系図は共通の祖先に辿り得るが、男系の紐帶も女系のそれも同等の重要性を有し、且構成員相互の婚姻も例外的ではあるが許されているので、或は氏族と言わず準氏族とでも呼ぶべきであろうか。一員たる地位を公認せられるのである。ついで男児のみについてであるが、七八才の頃グンテン（断髮式）の嚴肅な祭儀が行われる。その営む機能については明確な判断を下し得ないのであるが、私行事の過程等より見て、その子供に勇氣や実行力を把握するための心構を体得させる宗教的儀禮であると解している。第二は男女共に成年式が行われるまでの子供であり、この間に小兒達は種々の基本的な經濟活動や部族の慣習などを習得しはじめる。第三は成年式が行われる十三・四才の未婚の男女であつて、この時期に於て大體社会の一人前の成員として必要な修業を終え、種々の社会的活動に参加しはじめる。往時は出草にも参加したであろうし、現在では同年輩の青年の協力を得て自己の山畠として耕作する者も見られる。第四は既婚の男女であつて氏族の中心をなす。第五は老人であり、彼等は氏族の伝統の荷い手として祭儀、政治及び經濟の各部面に於て支配的な地位を占めている。之を文明社会の年齢層に比較してみても異なる点は、第一に結婚年齢が男子十五・六才、女子十三・四才で、早く家庭人として一人前の働き手となることである。第二に重要な点は成年式である。成年式の方式は民族の異なるに従い多種多様であるが、その多くの例は Frazer の金枝篇の中に見出される。ダイヤ族では、男女十三、四才に達すると、公に涅齒の式が行われる。涅齒とは上顎下顎の齒を鑪で切り揃え、その齒を黒く染めることである。現在では男子は齒を切り揃えるだけで、染齒するのは女子だけである。涅齒の式即ち成年式は、個人を「完全に」民族の正当なる成員として、總ての機能に適合させ、彼を完き者とするために行われる宗教的儀禮であると共に、社会的訓練でもある。第三は老人の權威の高いことである。未開社会を支配するものは父祖よりの伝承の生活様式としての慣習であり、彼等はその伝承的生活の域を脱しようとしなない。若し伝承生活の上に安眠を貪つている未開人の生活の一小部面に対してでもそれを改めさせようとする者あらば彼等はその改革

要を見ず、又之を許容しないのである。

奴隸制度の存在は、戦争にのみ起因するものではない。いわゆる負債奴隸や犯罪奴隸の如きは部族内奴隸である。かかる奴隸は古代文明社会に多く現われているが、未開社会ではその例に乏しい。

戦争は更に征服部族全体が、被征服民を下層としてその上層民として立つ契機を与える。又、一部族の内部に於ても、武勇の秀れた者を集団の統率者たる地位に立たしめる。そして戦争のための首長を中心として戦士達は一般民衆より上位の階級を形成し、又、社会の戦時組織の発展は、戦争の指揮者をして独裁的権力者たらしめることもある。然し未開社会に於ては、我々が想像するほど頻繁に全体社会が組織的に闘争を続けたものとは考えられない。ダイヤと言えば直に首狩を聯想さすほど有名な首狩族である。彼等は、数十年前までは相当盛に首狩を行い、現在未だその跡を絶つたとは言得ないが（私の調査中、他の地区に於て邦人が殺戮された事件が三件あつた）首狩は殆んど復讐とか呪術・宗教的動機に基くものであり、それが全体社会の闘争にまで発展することはない。だから一般的に言つて、未開社会に於ける戦争は、階級形成に多く寄与しているものとは言得ないであろう。

(二) 宗教

Danzel は文明人を技術人とし、未開人を呪術人と規定した。即ち文明人の行態は主として技術的に行動する傾向を有つて対し、未開人には呪術的な行態が特徴であるというのである。事実未開人は一切の行為は、呪術・宗教的行為との混融を示し、彼等自身常に呪術を行い以て現実の合理的知識のギャップを充たし、彼等の生活を充実させているのである。然し未開人は総て呪術者でありながら、何れの未開社会に於ても特に呪術師（巫者、呪医、祭司、魔法師）なるものが存在する。呪術師は、風雨を支配し、農作物や狩獸、漁撈の獲物を多くし、動植物の繁殖を左右し、病氣を治療し、危険な敵の呪術を無効にし、又、重要な祭儀の正確な執行者であるので、彼等は部族にとつては不可欠の人物となり、部族の成

員から信頼、畏敬せられ、爾余の一般者よりも優越な地位を占め、かくて部族に於ける特権的地位を獲得するに至ると、よく説かれる。然し私はここでダイヤ族のスマーナ（呪術師）について反対の事実を示してみよう。スマーナは一般的な生活様式に於ては他の普通人と特に異なる点は無く、日常は農耕に従事し、ただ公共的祭儀の執行せられる際に儀礼の正確なる執行者となり、私的祭儀即ち各種のブレンガン（魔祓式）に招かれては悪霊退散の事に当り、又、難治の病気の治療の任に当る。いわば祭司と呪医の役割を演ずる。その地位は世襲ではなく、スマーナになるがためには、スマーナ的性向——神経質で、感受性が強く、hallucination にかかりtrance に入り易い——を有する者が、一定形式の呪文と祭儀に於ける行事の法式を覚え、手品師の所作に似た治療術を心得、就任式の儀礼を営むことによつて就任するので、それがために特別の修業を積む必要はないのである。スマーナは一部族に数人存在するが、彼等はカスト組織を作すことはない。又、彼等はその能力などによつて部族の信望を集めている程度で、部落の公的な政治生活に容喙し之を左右するが如きことはない。

一般的に見て、呪術師や祭司と呼ばれる者がその専門の優れた能力の故に、彼等だけで特権的な社会層を形成することは少いのではなからうか。

(三) 職業

未開社会に於ては、一般に分業は未発達な状態にあり、従て職業の分化も低度である。職業と社会的階層が比較的目立つて見られるのはポリネシヤとアフリカである。ポリネシヤでは、舟造り、大工、刺繍師の如く、高度の技術を要する業務に従事する者は社会的に高い地位にあり、或る部族では中世のギルドに類似した組織を有し尊敬せられていると言われている。東アフリカでも職業団体があり、或る部族では皮細工人が特殊部落化して一般人の結婚も禁止せられ侮蔑されているという。それ等の社会生活に於ける特殊の職業と社会的地位について言えば、尊敬を以て遇せられる職人は地位が高

く、軽侮を以て視られる職人の地位は低い。然し職業の別による階層の成立は一部の未開社会に見られる現象であり、職業の分化の低度な一般民族に於てはその例を見ることは少く、勿論ダイヤ族に於てもかかる階層を見ることは出来ない。

(四) 富

未開社会に於ては、我々の社会に於けるが如く、富の多寡によつて社会的地位の高下が決定されるであろうか。それより先づ、未開社会では富有者と貧困者の差別が見られるか否かの問題を解決しなければならぬ。財産と言へば先づ土地の所有が問題となる。私には別に、ダイヤ族の土地制度の調査を基礎にして記述した「原始土地法慣行序説」(鹿児島縣大商経学会編、商経論叢第一号所載)の小論があるので、詳細はそれに譲ることとし、本稿ではその大要のみを述べることにする。

ダイヤ族の部落は、血縁的であると同時に地縁的集団である。その部落が単位となつて一定範囲の土地を持ち、各戸は組織ある慣習に従て自家に必要なだけの土地を自由に使用し耕作している。おおまかに言えば、土地は成員の私有地ではなく、部落民全体の総有地である。即ち岩山、未耕の原始林、休閑地となつている倭林、聖山、墓地、濕地帯、水浴場、河川、高床長家の床下の土地及び長家の前後にある広場等は勿論、一年間使用し耕作した後の山畠も再び部落の総有地に復歸するので、成員の土地の所有ということは考えられない。然し仔細に調査してみると、彼等の社会にはトマワイと称する制度が見られる。この制度は遠く部落を離れた森林中に、ダマール樹脂を採集するために建てた小屋の跡又はカヌーを建造する必要上河岸に造つた小屋の跡の土地が夫々彼等の私有地となるのである。又、テンカワンその他の果樹や、ゴム樹や椰子樹や胡椒等を植栽するために開墾したクブン(園)を有つ部落の間では、そのクブンが私有地化され、こゝに土地所有制度の萌芽を見るのである。この土地総有制は、土地が広大であつて、各人の需要を充たして尙余りがあるがためだとのみ解すべきではなく、土地はパンガナー(神)が万民の利益のために創造したものであるから、個人が独占すべきものではなく、万民は平等に土地に対して持分を有する、と言う宗教的意味も附随しているのである。彼等にとつ

ては、土地は我々が考えているような財産ではなく、従て土地の私有に基く貧富の差は認められず、このことは風土的、経済的條件を同する他の未開社会にも当筈のように思われる。

土地について言われることは、程度の差こそあれ、その土地から生ずる食物に關しても言われる。ガイヤ族について言えば、彼等は生理的必要を充足する以上に多量の靱を蓄積する。それは社会的慣習を守るために饗宴又は贈答用として必要であり、親族間の拘束性の強い分配の義務を果すためにも必要である。道徳的には他人に対して物惜みせずとの命法の上から食物を分け合ねばならぬし、宗教的恠は神や精霊と合一、交流するために必要なのである。狩猟、漁撈の獲物についても、その当人一人が自由に消費、処分することはなく、部族の慣習に従て一定の人に之を分配しなければならぬ。分配するに足らざる少量の獲物の場合は格別、然らざる場合に分配の義務を果さないときはコンポナン罪に問われ、部落の裁判によつて罰金を科せられる。かく生産手段としての土地に關しても、土地からの收穫物に対しても独占的、排他的の私有は認められないのである。

然しガイヤ族に於ても個人が労力を加えて自ら製作した道具や武器や衣類などは、個人的な私有物であり、これ等は相續人に相續もされる財産である。だが單純な生活を営む彼等の生活に於ては、多種類の道具等を必要としない。ただ彼等の中には稀には高価な甕類や銅鑼などを所有している者も見られるが、それは財を持つことを誇示する心理的動機に基くものであつて、それによつて権力を得ようとする野心もないし、又、富を有つことのみによつて社会的に高い地位に立つこともない。

以上考察して来たように、社会的地位又は特權という点から見れば、未開社会に於ては女性と成年式を終えない子供を除くほか、大体に於て平等である。然し如何に單純な未開社会とは言え、それが社会としての統一的機能を営むがためには、そこには一定の法的規範と何等かの意味の統率者がなければならぬ。私は最後にこの統率的主体につき、各経済發

展段階に即応して簡単に説明しよう。

低級並びに高級狩獵段階 ($H_1 \cdot H_2$) 及び低級農耕段階 (A_1) に於ては、一般に集團の單位が小さく、社会組織も發達せず、又、政治組織も整つていない。然しそこには首長、長老會議その他の中心的政治機關を構成するものも認められるし、又、文明人の觀念からすれば組織的な政治機關とは言えないにしても誰か個人的能力の秀れた者が、支配權とは言い得ないとしてもその集團全体の統率權或は指導權を握つてゐる。その何れにしても決定的な指導權は、常に集團成員全体の輿論に基くものである。低級牧畜民 (P_1) は今日何処にも存在しない。牧畜と農耕とを合せ行ふ高級牧畜段階 (P_2) の範疇に屬する民族としては、アジア及びアフリカの原住民が挙げられるが、この經濟類型に屬する民族の間では、各部族には部族成員全体の輿論に基いて推戴された首長があり、而もその首長はその外に存する長老の會議体の同意を得なければ何事も決定することが出来ないのである。中級農耕 (A_2) の段階に達した民族については、ダイヤ族の実調査に基いて記述する。ダイヤ族の地縁的單位はカンボン (部落) である。部落は境の定つた一定の土地を有つて居り、部落民は全部一棟の長家に共住し、單一家族の小屋、小氏族の共同家屋等が集つて聚落を形成するといつたことはない部落には村政會議体があつて各戸から一名宛之に参与する。この會議は、建物を部落内又は部落外に多転する場合、他部落民を部落民として編入する場合或は、トベ流し (トバと稱する一種の毒草の汁を河川に流して魚獲する方法で、時には数十部落が共同して行うこともある)、又は山燒の時期や收穫祭の日取の決定等、部落全体にとつて重要な事項を決議するために催される。又、部落には一名のクパラ・カンボン (部落長) があり、その代理制度としてクバヤンの制度がある。部落長は曾ては戰鬥防衛の指揮者として有能な者が選ばれたであろう。然し現在では何よりも先づ部落や部族の慣習に通曉し、民事、刑事の裁判のよき裁判長としてまた部落内外の紛争の調停者として有能の者であり、更に氣前がよく、弁舌に巧な者の中から、部落民によつて推戴せられる。こうして選ばれた部落長の政治権力は強力ではなく、彼は多くの場合、平等者中の第一人者 *Primus inter*

er parties に過ぎず、集団の意思に反して自己の無制限な専横や放肆な欲望を満足せしめるということは許されず、その権限は部落の伝承より逸脱せざる範囲内のみ制限せられる。彼等の社会を支配するのは輿論であつて Lowie が「多くの未開社会では組織的な権威よりもむしろ輿論に支配される」といつた事実をそのまま肯定せざるを得ないのである。

この輿論こそ、いつとも知れぬ太古から存続している部族に伝統的な総意以外の何ものでもない。従てこの意味に於て、始源的経済形態たる低級採集、狩猟生活団体から高級農耕段階に及ぶ未開社会に於てこそ眞の直接的民主政治が行われていると言い得よう。